



バナナの主の箕田さん。広い屋敷の手入れに余念がないとのこと

平田中地区を歩いていたら、亜熱帯地域かと見間違えようような光景に遭遇。なんとある屋敷の門口に大きなバナナの木が育ち、数え切れないほどの青いバナナがたわわに実っているではありませんか。

その立派な実りをまじまじと眺めていると、主の箕田幸憲さんが顔を出し、「今年の4月にここに移植した

箕田さんちのバナナ

うにコンバインが走ります。次々と美しく刈り取られていくさまをじーっと見入っていたのは、筆者の他にもう一組。あぜ道に降り立った数羽のサギが、刈り取りを終えた田んぼに潜むカエルやミミズを狙っているもよう。

さらに、なんともう1人も…。そのサギたちの姿を望遠カメラで狙っていたのが「木山・宮園編」の散歩で出会った、写真愛好家の山来敬明さんです。晩秋ののどかな田園では、ほほ笑ましいバトルが繰り広げられていました。



箕田さんが自画自賛したパイナップルの苗が育っています



たわわに実った箕田さんちのバナナ



愛犬の「アポ」。おとなしくてかわいい男の子です

ら、あれよあれよという間にこうなつて。俺もビックリたい」と笑います。

4年前にホームセンターで苗を見つけ、ビニールハウスで育てた後、2坪ほどの丈に成長したものを移植したのだそう。暑かった今年の夏が急成長をもたらしたのかもしれない。

「そしてね、今年実ったパイナップルが砂糖漬けたごつ甘くてね。まぐれかもしれないけど、挿し芽して増やしてるところ」と楽しそうに話す箕田さんですが、実は7年前に妻の悦子さんを亡くしました。「ようやく悲しみにも慣れてきました」とつぶやくように話します。

悦子さんが健在の頃、料理などしたことがなかった箕田さんですが、今で

は得意料理も増えました。「先日、高校時代の友人たちとわが家で酒盛りしたんです。友人が持ってきたアサリ貝をバター焼きやみそ汁にしたり、ホルモンのみそ煮込みをごちそうしたら『こりやうまか。店を出したら？』と褒められました」と笑顔が戻りました。

私たちの話をしつぽを振りながら聞いていた愛犬の「アポ」が庭の木陰でウトウトと寝入っています。「孫娘たちが『アモ』と名付けたばつてん、いつの間にか『アポ』になった」と、箕田さんは愛おしそうに見つめました。

父ちゃん、がんばっています

箕田さんの家から坂道を下ろうとして、右手に鍍金工場を見つけてました。中から「こんにちわっ！」と声を掛けてくれたのは、大窪一輝さんです。大窪さんは馬水地区の出身で下砥川に自宅がありますが、今年1月に縁あって平田地区に工場を構えたそうです。

「まだご挨拶ができていないお宅もあります、平田の皆さんに温かく見守っていただいています」と大窪さん。長女で小5の藍葉さんは、2年前に

広報ましきの「がまだしもん」で紹介したピアノリストを目指す少女です。「親が勧めたのではなく、自らピアノに触れる楽しさを見つけたようです。小3の次女もピアノに夢中で、中1の長男はやりたいたいがいつぱいあるらしく、末の息子はまだ1歳。父ちゃん、バリバリがまださんと」と笑う明るい性格の父ちゃんです。

そんな父ちゃんは野球少年でした。成人してからも地元の同好会に所属し親しんできました。「もう身体がおいつかんです。でも、野球を通じて出会えた地元の先輩や仲間とのつながりは宝物です」と話します。

スタッフの大隈翔流さんと仲良く肩を並べ、カメラに笑顔を向ける大窪さん。お仕事がんばってバリバリ稼いでねー、父ちゃんっ!!



左が大窪さん。人柄が伝わる笑顔です。右がスタッフの大隈さん